論文の要約

論文題目　ディアスポラ方言としての在日コリアンの朝鮮語に関する社会言語学的研究
　　―朝鮮学校コミュニティを中心に―

氏　名　　權　恩熙

論文内容の要約

人は常に「移動」する存在であり、そういった移動は自分とは異なる個人、異なる集団との「出会い」を伴う。そして、その出会いによりどちらか一方または両方に「変化」が生ずる。その変化は様々な領域で起こり得るが、異なる言葉を話す共同体が出会うと、お互いの「言葉」に変化をもたらす。移民コミュニティはまさにその代表例であるが、渋谷(2005:356)でも言及されているようにそういった変化は移民2世で止まることが多く、3世以降からはホスト社会の言語へとシフトする場合が多い。しかし、朝鮮学校を中心とした在日コリアン・オールドカマーのコミュニティでは4~5世に至るまで日常生活の諸場面において依然として朝鮮語が使用されており、彼らの朝鮮語は「方言使用如何を含む世代差や本国の親戚の共和国の規範語・韓国の規範語、あるいは社会の日本語の間で、多方面からの影響」(植田2009:139)を受けながら、独自に発展し、共和国や韓国のそれとは異なる特徴を多く持つようになっていると報告されている。その特徴のある朝鮮語は社会言語学的に注目度が高いが、外部に閉鎖的なコミュニティであるとの認識とアクセスの難しさ、研究の難易度のせいで、言語使用の具体的な実態についてはあまり明らかになっていない。

このような背景のもと、本論文では朝鮮学校を扱っているドキュメンタリー7点と朝鮮学校の中級部と高級部授業7回分の録音資料における在日コリアン3世以降の自然発話をもとに、「在日朝鮮語」と呼ばれている言語変異の実態について実証的かつ定量的な分析を通して究明することを試みた。また、分析の際には参考資料として朝鮮学校内の言語景観の写真も活用した。その結果、朝鮮学校コミュニティの朝鮮語は、一般に言われていることとは異なり、単なる「日本式朝鮮語」などの言葉だけでは説明できない複雑多岐な重層性を持っていることが証明できた。

第4章では聞き手敬語の運用様相について調べた結果、韓国と共和国と同じ6等級の敬語の体系を持っていながらも、具体的に使用される語尾は共和国の影響が窺えた。具体的には共和国でのみ使用される語尾「-자요cayo」と「-으라ula」、韓国ではもはや死語化、役割語化しつつあるスピーチレベル「하오hao□」の使用が目立ち、共和国の言葉にもとづいた教科書と教育の影響と考えられる。一方、1世の渡日当時に広く使用されていたスピーチレベルが現在も使用されていたり、メディアなどの影響によって現代韓国で最も多く使用されるスピーチレベルが使用される例も観察された。このように形式的な面では韓国と共和国の影響を強く受けつつも、具体的な敬語運用ルー

ルに関しては日本語の影響を受けた側面もあり、目上の人に対して非尊待待遇等分を用いるケースが確認された。さらに、聞き手敬語の運用と直接的な関係はないが、朝鮮学校内で長年続けられてきた書き言葉中心の教育により、書き言葉的な語尾の使用が多く見られるのも特徴的であった。

第5章では朝鮮語呼称の使用様相について調べた。その結果、親族名呼称は1世の最大出身地である現代の韓国地域の朝鮮語から強く影響を受けており、通称的呼称は共和国の地域方言である「아바이apai」の使用や尊敬接尾辞「님nim」の不使用など、共和国の朝鮮語から影響を受けている様子が確認され、日本語の影響は比較的に少なかった。日本語の影響と見られるのは「名前単独呼称」と「韓国の親族名呼称の音声的変異形」の使用のみであり、その他に「変形テクノニミーの使用」などのように日本語の影響と見られる現象は事例が少ないため、追加調査が必要と考えられる。

第6章と第7章では「書き言葉の話し言葉化現象」の実態について、「書き言葉的な語」と「非縮約形」という二つの側面から韓国のコーパスとの比較を通して検証を試みた。その結果、書き言葉としての性格が強い語や非縮約形が話し言葉においても多く使用されていることが確認できた。このことは日本語の影響とは考えにくいものであり、朝鮮学校コミュニティの構成員(3世以降)が基本的に学校型バイリンガルである点、長い間帰国を念頭に置いた書き言葉中心の教育なされた点など、独特な事情が影響を及ぼして独自に発展を遂げた結果と見られる。これは朝鮮学校コミュニティの朝鮮語は日本人朝鮮語学習者のそれと類似しているとの通説を裏返す結果であり、朝鮮学校コミュニティの独自性を裏付ける最も重要な要因のひとつである。

第8章では朝鮮学校コミュニティにおいて使用される朝鮮語の表現構造に注目した。共和国と韓国ではあまり使われない名詞的表現が朝鮮学校コミュニティでは比較的多く観察されていた。このことは、朝鮮語を使用する際の言語的思考のベースが日本語であることが影響している可能性が高いことを示している。前述した聞き手敬語の使用ルールのうちに、目上の人に対して尊待待遇等分のスピーチレベルを使用できることとも繋がる内容である。ただ、具体的に見ていくと、朝鮮学校コミュニティの名詞的表現の中には日本人朝鮮語学習者(中·上級レベル以上)からは確認されない名詞的表現が観察される。そのため、朝鮮学校コミュニティの朝鮮語が日本人朝鮮語学習者の朝鮮語と何ら変わりがないと言うには語弊があるであろう。

このように多方面から影響を受けながらも独自に発展してきた朝鮮学校コミュニティの朝鮮語であるが、それらすべてが同時期に影響を及ぼしたわけではない。第2章で見たとおり、時代ごとに彼らの言語に影響を及ぼすいろいろな出来事が存在し、その影響を受けて朝鮮学校の朝鮮語も多様な姿に変容してきた。1世と2世は日本語と渡日当時の韓国の地域方言の影響を強く受けていたが、家庭内での朝鮮語習得が難しくなった3世以降は「朝鮮学校」教育の影響をもっとも強く受け、共和国の朝鮮語が軸となっている中で日本語の影響も窺えるような朝鮮語を使用するようになっている。さらに1世のほとんどが亡くなった今となっては渡日当時の慶尚道と済州道方言の影響は語彙程度にとどまっていると見られる。

さらに朝鮮学校コミュニティの朝鮮語は、大きく3つの側面を持っている。まずは「継承言語」としての性格を、学習者の「中間言語」としての性格、そして「学校型バイリンガリズム(金徳龍1991)」としての性格も持っている。ここで「継承言語」としての側面を持っているというのは、在日コリアン1世の朝鮮語が次の世代へ受け継がれること

により現れる特徴があることを言う。本論文の場合、在日コリアン1世が渡日する当時(現代国語第2期)の朝鮮語と1世の出身地(主に慶尚道と済州道)の方言が影響を及ぼしていることを意味する。次に「中間言語」としての側面を持っているというのは、日本語を第一言語とする2世以降が、朝鮮学校において朝鮮語を第二言語として習得していく過程であらゆる特徴が現れることを意味する。最後に「学校型バイリンガリズム」としての特性というのは、学校、特に朝鮮学校という特殊な空間を介して朝鮮語を学ぶことによって現れる特徴があることを意味する。朝鮮学校ではイマ―ジョン方式で朝鮮語教育が行われるため、生徒たちは一般科目の授業を朝鮮語で受けることで「習得」に近い形で朝鮮語を学習する。ところが、生徒たちにインプットされる教科書と教員の言葉は書き言葉としての性格が強く、その影響が話し言葉にも出ているのである。

ここで重要なのは、多くの移民コミュニティの言語とは異なり、こういった重層性のある朝鮮語が1世代や2世代で断絶されてしまうのではなく、「朝鮮学校コミュニティ」を通して共有され、継承されていくという点である。祖国の植民地化に対する反作用とホスト社会の根強い差別により、完全に日本社会へ同化するか、民族教育を中心とした別途の独自のコミュニティに属する傾向を強め、在日コリアン·オールドカマーのコミュニティの中で最大の規模のコミュニティが「朝鮮学校」という民族教育の場を中心に形成されていった。今の朝鮮学校では、日本語が母語である2世から朝鮮語を習った朝鮮大学校出身の3世の教員が4世、5世の子供たちを教えているが、共和国や韓国から朝鮮学校に教員が派遣されることもまったくない。また、日本学校を卒業した者や日本人が朝鮮学校の教員になることもほとんどない。そのため、彼らのみの独特な特徴を持つ朝鮮語が、朝鮮学校を通して独自的に継承・再生産されることが可能になったのである。

では朝鮮学校コミュニティの朝鮮語は、地域方言や社会方言、ピジン/クレオール、接触言語、コイネといった言語変種に関する既存の諸社会言語学の概念の中でどれに該当するのだろうか。本論文では「ディアスポラ」に該当する移民集団の言語変種の新たなカテゴリーとして「ディアスポラ方言 」を提案したい。김하수(2017)の言う「디아스포라와 연계된 한국어의 변종(ディアスポラと連係された朝鮮語変種)」がこの概念に近いと考えられる。こういった移民言語変種の新しい下位カテゴリーを設定することにより、今まで「ピジン的な」「ピジンに近い」「日本地域方言」などのように曖昧な表現で説明され、不適切にカテゴライズされてきた朝鮮学校コミュニティ(3世以降)の朝鮮語について、より明確な概念を用いて説明ができるようになることを期待する。